

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0270600570		
法人名	有限会社 とわだサンライフ企画		
事業所名	沢田のグループホーム 和つぷる		
所在地	〒034-0302 青森県十和田市大字沢田字田屋10-4		
自己評価作成日	令和5年1月17日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人青森県老人福祉協会		
所在地	〒030-0822 青森県青森市中央3丁目20番30号 県民福祉プラザ3階		
訪問調査日	令和5年2月22日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>※和つぷるのこだわりである、優しい目と和ませる笑顔で温かい家庭環境に努めています。                  ※気づきを大切に、「今、望む」ケアで、一人ひとりのその人らしさを尊重しています。                  ※全スタッフが利用者や家族と信頼関係を築き、共に支える家族でありたいと考えています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点・工夫点(評価機関記入)】

<p>周辺に市の交流施設や小学校、高校があり、日常的に散歩やゴミ拾いを通じて地域の方との関わりを持っている。コロナ禍前は学童保育の児童との交流機会や高校のJRC活動の行事に参加している。運動会への参加は継続しており、利用者ができるプログラムを入れていただき、見学だけでなく参加できるように取り組みを行っている。運営推進会議には民生委員や町会長、消防署員等が参加し、利用者の近況や事業所の運営についての情報交換だけでなく、健康や認知症についての勉強会や避難訓練を実施し、活発な連携を図っている。職員は普段のケアや会議、勉強会を通して情報を共有し、理念をもとに利用者ひとりひとりの状態や希望に合わせた支援ができるよう取り組む工夫をしている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝の申し送りで、ホーム理念と地域理念を唱和することで高い意識を持ち、常にどのような関わりを持てばよいか考えてケアに臨んでいる。また、毎月短期目標を掲げて取り組み、毎月の会議で反省を行っている。	理念の内容を事務室に掲示するとともに、朝の申し送り時に職員で唱和し、皆で共有して実践に繋げるよう努めている。また、理念やケアに沿った目標を毎月掲げ、職員会議で振り返りを行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により地域とのつながりが少なくなっているが、近隣の高校や小学校の運動会の見学や廃品回収への協力などを行っている。また、近所の方から野菜を頂いたりしている。散歩の際は挨拶を交わし、ゴミ拾いをする等、日常的に繋がりを持つことを意識しながら過ごしている。	以前は利用者と近隣の小学生や高校の学校活動を通じて交流機会を積極的に行っていた。現在は交流は少ないが、運動会に招待され、見学するだけでなく、競技にも参加する等、可能な限り交流できるよう努めている。また、地域の方から野菜等のおすそ分けを頂く等普段から交流機会を持っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の前は近隣の高校JRCの学生や学童保育の児童との交流の中で認知症の人との関わり方を伝えていた。運営推進委員会を通じて認知症の特徴や事業所での取り組み等を理解して貰えるよう努めている。また、短期大学生の受け入れも行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	認知症施設の理解を深める為の議案を挙げ、メンバーから意見を聞き、運営やケアの見直しに繋げている。外部評価の取り組みや結果についての説明を行い助言をいただいている。コロナ禍前は救命救急講習、避難訓練、利用者交流、また、健康運動指導士の方を招き体操、健康に関する講義等、参加型のテーマも取り入れている。	民生委員や町会長、消防署員、地域包括支援センター職員等の参加があり、運営状況や事業所の取り組み報告、情報交換を行っている。また、健康や認知症、防災等についてテーマを掲げて勉強する機会を作っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議への出席のほか、福祉に関する市の情報やアドバイスを頂いている。また、コロナウイルス対策についての相談、ワクチン接種に関する対応等協力して頂いている。	普段より、介護保険制度や健康、感染対策についての対応等、やり取りがある。運営推進会議では地域包括支援センターから市の情報提供を頂き、協力体制を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルを作成し全職員が身体拘束をしないさせないことの理解に努めている。玄関前は交通量が多いことから、事故防止としてスイッチで開くように設定し、ドアが開くとチャイムで知らせるようになっている。玄関については家族に説明し理解を得ている。身体拘束検討委員会を設置しており3ヶ月に1回勉強会を行っている。	職員会議や勉強会で身体拘束やケアの振り返りを行っている。また、職員間で普段のケアや虐待についてのアンケートを実施し、身体拘束についての共通意識を持つよう取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ホーム内の勉強会で「虐待の芽、不適切ケアチェックについて」アンケートを取り、日々のケア方法を見直し虐待防止への意識を高めている。法令遵守の説明の際に疑問に感じたときは声に出し、見過ごしてはいけない問題として認識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についての資料を中心とした勉強会を行い全職員が理解を深めるように努めている。数年前に講師を招いた勉強会では参加した家族や推進委員の方が制度を知る機会を設けた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時と解約時には、代表や管理者が必ず立ち合い、十分な説明を行い、不安や誤解のないよう配慮して同意を得ている。運営内容変更時も説明し、同意を得ている。その他にも説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の日常の言動から気づけるように観察している。家族からは面会時に意見要望をさりげなく聞き出せるように話しやすい雰囲気作りを心掛け、信頼関係を築いている。意見箱も設置しており、家族の推進会議や担当者会議への出席の際も率直な意見要望を聞く事ができ、ケアの向上につながっている。	利用者とは日々の関わりから、家族等については面会や電話等にて、意見や要望等を積極的に伝えてもらえるよう工夫し、運営に反映させるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議に代表も出席し、職員の声を聞いている。また、日常業務の現状等を把握したうえで、職員からの意見や要望に対してきちんと向き合い話が出来た環境となっている。	管理者が日常的に職員の意見を吸い上げ、対応するよう取り組んでいる。また、月1回の職員会議時の意見や提案を管理者や代表が聞き入れ、業務改善を行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は一人ひとりの能力や得意分野、不得意分野等を把握し、やりがいのある現場作りに努めている。家庭環境を考慮し、希望に沿った勤務体制としている。定期的に健康診断も行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修、内部研修の計画を立て参加し、一人ひとりのレベルアップを図っている。研修後は資料や報告書で振り返り、勉強会を行い質の向上に取り組んでいる。資格取得の際は、日々のケアに支障がでないよう勤務体制を配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	系列施設のショートステイや他法人のグループホームと交流を行っている。双方に行き来する等良好な関係であったが、コロナ禍になり、現在は職員同士が近況や相談事、コロナ感染対策等の情報交換を行うなど電話で交流している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所にあたり、不安や要望等がなかなか言い出せない事を考慮し、家族を交えて、さりげない会話から緊張をほぐし、思いや要望を引き出している。コミュニケーションを大切に、信頼関係を築けるように心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前はホームの見学や説明をしており、家族との事前の面談や連絡を十分に行っている。家族の身体的、精神的負担を理解し信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	十分な面談を行い、必要とされる支援が受けられるように、担当ケアマネジャーの情報提供や家族の思いや考えを把握し、今必要なサービスが提供出来るよう支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来る事、やりたい事が思うように出来ない事などを見極めて、掃除や料理の下ごしらえ、創作活動と一緒にしながら、日常生活に寄り添い支え合い、職員は入居者に対し、尊敬と感謝の気持ちで日々過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の生活を面会時や毎月の手紙に写真を載せてお伝えしている。状況に応じて面談を行い意見交換をし、家族から入居者の好きな料理を持参して頂く等、日々の生活を共に支えている。また、居室には家族の写真を飾り一番身近な人である事が分かるように工夫したり、コロナ禍前は家族参加の行事で一緒に過ごす時間を作っていた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出支援で自宅や長年行きつけの美容院や友人宅に連れていく等、関係が途切れないよう支援に努めていたが、コロナ禍の為現在は、電話での会話、手紙のやり取りや窓越し面会を実施し馴染みの人との連絡が取れるよう工夫をしている。	コロナ禍により外部との交流は控えているが、家族と窓越しでの面会や遠方の方との手紙のやり取りを行っている。また、近隣の場所へ散歩やドライブを行い、地域の方や場所との関係性が継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの生活歴や性格、日々の生活リズムを把握し、気の合った入居者同士が話しやすいように席の配置を工夫している。トラブルが起り得る入居者同士においても孤立しないようスタッフが配慮している。居室でおしゃべりを楽しんだり、共同作業を行い良好な関係が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も家族や関係施設の職員の方等から健康状態や生活状況の把握に努め、快適な生活が送れるよう情報提供を行っている。また、自宅へ退所された家族より、ケアの仕方の相談を受け、アドバイスをした。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりに寄り添い本人の立場に立ち何気ない言動に目を配り、思いや意向に気づけるように心がけ、気づきは「気づきノート」に書き、職員全員で検討しその人らしく過ごせるよう努めている。居室でゆっくり過ごしたい方には休んでもらったり、好きな花を飾って頂く等、また本人が望まない事は無理強いせず入居者個々の考えを尊重している。	普段の会話や家族から生活歴や趣味・嗜好等を聞いたり、仕草や表情等から思いを汲み取り、「気づきノート」や申し送りで職員共有を図っている。本人本位の考え方や自立支援に向けて支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用し、生活歴や環境などを把握するよう努めている。家族や知人の面会時に、これまでの暮らしなどについて確認し、それに近い生活が出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートを使い、日々心身の状態を把握している。スタッフ会議で、出来る事は現状維持、出来ないことは支援するという事を共通理解とすることを確認している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日の実践記録と月1回のモニタリングを実施し、家族に状況報告を行っている。担当者会議では、入居者や家族の意向、職員の気づきを取り入れ、現状に伴ったプランを6ヶ月に1回作成している。毎月のスタッフ会議では統一したケアになるように理解を深めている。状態変化があった場合はその都度見直しをしている。	担当者やケアマネジャーを中心に利用者の状況や意見を聞き取り、モニタリングを行っている。それをもとに介護計画を作成し、担当者会議を行い、家族に要望の聞き取りや計画の説明を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一日の生活状況が分かるように24時間の記録を行っている。個別のファイルには項目で色別し、生活や受診状況、服薬内容等、あらゆる様子が分かるよう行動や会話を記録している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人ひとりのニーズに合わせ、受診付き添いや送迎等柔軟に対応している。天気の良い日はドライブに出かけたり、またコロナ禍前は気の合った入居者同士での外食等、嗜好に合わせて対応していた。現在はホーム内で出来る軽作業を中心に、塗り絵や創作活動等のレクリエーション活動を楽しんでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍前は近隣の高校からJRC愛好会の生徒が来ており、行事の協力や交流を図っていた。災害時や緊急時には協力が得られるよう近隣の方や推進委員への働きかけ、消防署、消防団との連携を取っている。今後も関係機関への連携を図る為ホームの取り組みを定期的にお知らせし、理解して頂くよう努める。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医の受診を継続出来るようにしている。病状により他の医療機関を受診する場合は、本人やかかりつけ医、家族と相談して適切な治療が受けられるよう支援している。受診結果は家族に報告している。時には家族とスタッフが同行受診し状況把握を行っている。	かかりつけ医の定期受診は主に事業所に対応しており、家族には受診結果を電話で報告し、急な体調変化等の時は同行して頂き、協力を得ている。また、普段の体調についても主治医に相談できる等、連携も図れている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフに看護職員がおり、日々の健康観察での変化にいつでも相談できる体制である。緊急時にはすぐ対応できる連絡体制となっており、職員も家族も安心している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院治療が必要になった場合に備え、定期受診時より常に利用者の状態を報告し、適切な治療が出来るよう連携を図っている。入院時は認知行動を細かく伝え速やかな治療回復、退院に向け医療機関と情報交換を行っている。コロナ禍前は出来るだけ面会を行い入居者が安心出来るよう声がけしていた。家族が入院時の対応をできない場合は、状態経過などを報告している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在終末期の対応を行っていない事を入所前の契約時に本人、家族に説明している。重度化した場合のホームでの出来る対応については、家族と話し合い意向を確認している。終末期のあり方について勉強会を設け全職員で話し合いをしている。	事業所での看取りの対応は行っていないが、入居時や利用者の状態変化に応じて、重度化や終末期に向けた意向を確認し、家族と職員が共通認識を持つよう努めている。職員は看取りについての勉強会を実施し、知識を深める機会を作っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルの作成や見直しを行っている。また緊急の対応に備えた訓練や応急処置について看護職員を中心に動画を使い、勉強会を行っている。また、普通救命講習の受講、消防職員を講師に招き、ホームでおこりうる事故を想定した勉強会も行った。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルの作成や見直しを行いながら、月1回あらゆる想定で夜間や日中の避難訓練を行いその都度検証している。年1回消防署員の立ち合いで訓練も行い結果と反省をもとに体制作りの強化を図っている。緊急時の連絡体制や地域の協力体制、備蓄品の確認も行っている。夏・冬場の停電・断水を想定し発電機を使用した訓練も行っている。	毎月、日中や夜間を想定し、火災や地震の訓練を行い、運営推進会議の委員である消防署員の立ち合いのもと実施している。近所の方にも非常時の誘導等の協力依頼を行っている。非常食は、事業所で備蓄、管理し、停電時における発電機の使用方法を定期的に職員で確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりを尊重し、羞恥心に配慮した声がけやさりげないサポートを心掛けている。出来ない事や失敗したことに対して否定せず、傷つけないような対応を心掛けている。また不快に思わないよう一人ひとりに合わせた言葉使いを心掛けている。	普段の会話やトイレへの言葉掛け等、個々に合わせプライバシーを損ねないような声掛けやケアを行い、コミュニケーションがスムーズに取れるよう配慮している。また、勉強会や申し送り等を通して、職員間で振り返りを行い、共有意識を持つようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常会話の中から、思いや要望を引き出せるようコミュニケーションを図っている。言葉で表現できない入居者には、アイコンタクトで表情を汲み取り、自己決定できるよう選択肢を用意している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活リズムや体調・気分を全職員が把握し、その日どのように過ごしたいか本人の希望に沿った支援をしている。日向ぼっこ、外の散歩やドライブ等、業務優先ではなく対応できるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	誕生日にはいつもと違う衣類にしたり、行事の夏祭りでは法被や浴衣を着ての参加やひな祭り会では着物の柄を選んで着ていただき、自己決定の機会にもなっている。コロナ禍前は行きつけの美容院へ出かけたり、家族面会で居室で散髪をしたり個別の対応も行っていた。現在はホームの理髪サービスの利用を支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	気の合う入居者同士で楽しく食事が出来る座席の位置を工夫している。コロナ禍前は職員も一緒に食事を楽しく安全な食事が出来るよう声がけや見守りをしていた。個々の好物と苦手な物の把握に努め、調理の下ごしらえやおやつ作りを一緒にし食事への楽しみに繋げている。食事の準備や片づけは個々の力量に合わせて行っている。	食事の献立は、利用者に希望を聞きながら職員が作成している。食事の盛り付けや片付けは、可能な範囲で行っている。希望や嗜好を聞きながら、なべっこ団子等、利用者と季節の行事に食べるものやおやつ作りを一緒にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取の観察をし、一人ひとりの嗜好や食べられる量を把握している。水分制限、お粥や刻み食、トロミ食、塩分制限者には薄味にする等個々に合わせた調理方法で提供している。食器の大きさや色、盛り付けにより食事が進まない方もいるので工夫している。食欲がない方へは、高カロリー栄養補助食品の提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事後、声がけや誘導、仕上げ磨きなど行い口腔内の観察に努めている。歯科医の往診で治療、口腔内ケアについて指導を頂いている。口腔内体操を行い誤嚥防止に努めている。うがい行動が認識できない方には専用ウエットティッシュを使用するほか、義歯消毒も定期的に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	観察と記録で排泄パターンを把握している。事前誘導を行い、出来るだけトイレでの排泄できるように努めている。羞恥心が強い方には行動から察して対応している。自立利用者の排泄後はさりげなく確認し、次に利用する方が気持ちよく使用できるように心掛けている。排泄パターンが不規則な方にはスタッフ間で対応策を常に考えている。	全職員が記録等で個々の排せつ状況の把握に努め、本人の行動やサインを見逃さず、タイミングを合わせて声掛けや誘導を行い、自立支援に向けて取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人ひとりの排便状況を観察し記録している。運動や水分量、食事の工夫などを行い予防に努めている。便秘が続く場合は主治医に相談し、整腸剤や下剤の処方調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	午前に入浴し、午後はゆっくり休む生活リズムがあり、一人ひとりのペースに合わせ、1対1で対応しゆったりと入浴が出来るよう配慮している。入浴拒否や体調不良時は無理強いをせず足浴や清拭、着替えのみでの対応や入居者の希望、タイミングに合わせている。	週2回の入浴日はあるが、体調不良時や気分がすぐれない時等、入浴できなかった場合は時間帯をずらしたり、別の日に変更している。また、清拭や着替え等、利用者の都合に合わせて対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は居室や和室で昼寝をしたりソファでくつろぐ等、それぞれに居心地の良い過ごしやすい場所を工夫している。寝る前に読書をしたりテレビを見て過ごす方もいる。夜間上手く睡眠のとれない方には、スタッフが話し相手となり安心して頂くよう支援をしている。主治医と相談し眠剤を服用している方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容を理解し、主治医の指示通りに服薬支援をしている。誤薬ミスの無いように、氏名シートを使って職員同士で確認している。一人ひとり飲み込むまで確認している。服薬後の症状変化を観察し、受診時に報告している。在宅から入所になった方の薬の種類を医師に相談する事で状態が安定された方もいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活での習慣を把握し、趣味や楽しみを活かし一人ひとりの能力に合わせた支援をしている。畑での野菜収穫、草取り、花の手入れやレクリエーションでは好きな民謡や盆踊りを取り入れ楽しんで頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍により日常的な外出する機会が減ってきている。その中でも出来るだけ気分転換となるよう近所の散歩や人手の少ない場所や時間を選んでお花見・紅葉ドライブにて季節を感じられるように支援している。コロナ禍前は家族の協力で祭りや墓参り等、外出・外泊が行われていた。	利用者の希望で近隣の散歩や花見、紅葉狩り等気分転換が図れるよう季節に応じたドライブをコロナ感染対策を行いながら実施している。コロナ前は家族に協力してもらい外出や行事の参加を行っていた。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ドライブや買い物に外出するときは、家族と相談し、力量に合った金額を所持して頂いているが、購入まで至らないのがほとんどである。ホーム外にある自販機にて飲み物を購入する際は支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	日常的に電話をかられる体制になっている。家族からの手紙や贈り物に対して、電話やお手紙でお礼を伝えるなどして良好な関係を構築している。面会制限中の為、中々会えない県外の家族に塗り絵の絵葉書へ一言添えて送るという支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各場所に季節を感じられるように花や装飾品でまとめている。入所者の手作りカレンダーや行事写真等を掲示している。天窓から明るい日差しが入るホールには、入居者が集まってくる空間となっている。眩しい時はロールカーテンや座位置の配慮をしている。定期的な換気をしながら、室温湿度の測定も行い快適に過ごせるよう努めている。	共用空間は採光が良く、小上がりが設置されており、利用者が好きな所で自由に過ごすことができる。利用者と職員とで一緒に作った創作物が共用スペースや廊下に飾られており、季節感や制作した思い出を見て楽しむことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールのソファでゆったり過ごせるよう配置をし休まれたり、入居者同士で会話を楽しまれている。小上がりの和室では横になって休まれる方や気の合った入居者同士で洗濯物を畳みをされながら会話を楽しまれている。窓際に観葉植物、丸太椅子を置き外を眺めながらのんびり過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の間違いがないように一人ひとり工夫した手作りの表札を目線の高さに設置している。また、思い出の写真、家族写真や創作物、家族からのプレゼントの鉢花を置いて世話をする等している。その他、テレビを持参し自分の好きな時間に見たり、ござを敷いて過ごしたりする等自宅に居た時と同じような、安心できる居室作りに努めている。	備え付けのベッドとタンス、床頭台はあるが、衣装ケースや座椅子など使い慣れたものは持参してもらっている。また、写真や創作物を飾り、居心地よく過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの能力が発揮できるように環境を作り、自立に向けた支援を行っている。高い所の物を無理に手を伸ばし取ろうする等、危険な個所や事故の起こり得る環境を予測し環境整備を行っている。		